

【書 評】

François Allisson, *Value and Prices in Russian Economic Thought: A Journey inside the Russian Synthesis, 1890–1920*

Oxon: Routledge, 2015, x + 179 pp.

20世紀末のソ連の崩壊以来、ロシア革命に前後する時期のロシア・ソビエトの経済学・経済思想の動向についての原資料に基づく斬新な研究が次々と現れ、最近まで注目されることが少なかった経済学史・思想史の重要な諸局面がしだいに明らかになりつつある（本誌で書評対象とされただけでも次のような著作がある：Joachim Zweynert, *Eine Geschichte des ökonomischen Denkens in Rußland 1805–1905*, 2002（小島修一, 『経済学史学会年報』45, 2004）. Vincent Barnett and Joachim Zweynert, eds., *Economics in Russia: Studies in Intellectual History*, 2008（大田仁樹, 『経済学史研究』51（2）, 2010）. 小島修一『二十世紀初頭ロシアの経済学者群像—リヴァイアサンと格闘する知性』2008（竹永進, 同誌同号）. 森岡真史『ボリス・ブルツクスの生涯—思想—民衆の自由主義を求めて』2012（塚本恭章, 同誌57（2）, 2016）. もちろん、これらの日本国内外の著作に加えて、さらにロシア本国での多くの研究成果が存在する）。ここで取り上げるフランソワ・アリソンの本もこのような一連の研究動向にさおさすものである。本書は、著者がローザンヌ大学のワルラス・パレートセンターに2012年に提出した博士論文に手を加えて成ったものであるが、上にいくつかの例を挙げたロシア・ソビエト経済学史（思想史）のいずれとも異なるユニークな対象を同じくユニークな視点から扱おうとするものである。

タイトルにあるように、本書が扱う時期は

帝政ロシア末期からロシア革命直後までにあたる1890年から1920年までの30年間である。著者はこの時期のロシアの経済学の動きを、当時の代表的な経済学者たちがしばしば彼らの研究の目標としてみずからかかげた「総合（synthesis）」という視点から整理しようとする。この「総合」とは、リカードにさかのぼる古典派経済学の客観主義的な労働価値論・価格論と、1870年代に西欧諸国で同時に出現した限界効用概念に立脚する主観主義的な理論とを統合して、ひとつの新たな理論を生み出そうとする試みをさす。いわゆる限界革命の時代以降に、このような試みが一定の期間を通じてその時代を代表する一連の経済学者たちによってなされたというのは、本書が対象とする時期のロシアに固有の独特の現象だったのではないか。およそ30年という短い期間のこのような経済学研究の流れは、たえず新しい経済思想を西欧諸国から導入しなければならなかったロシアの「後進性」によって生みだされたと思われる。しかし、著者の言うように、こうしたロシア経済学の動向は、そこに登場する個々の経済学者の著作に含まれる理論・思想が個別のかつ断片的に検討されることはあっても、全体として捉えられたことはこれまで一度もなかった。この意味では、本書の試みは経済学史・思想史の未知・未開拓の領域にはじめて照明をあてた前例のない仕事と言えるであろう。

本書で取り上げられる上記の時代に活動し

た主要な経済学者は、具体的には、ツガン-バラノフスキー、ドミトリエフ、ポルトキエヴィッチ、シャボシュニコフ、ユーロフスキーの5人であり、また同時に、彼らの研究活動の前史を形づくったニコライ・イヴァノヴィッチ・ジーベル（1844-88）も大きく取り扱われている。これらの経済学者の名前は、シャボシュニコフ、ユーロフスキーの2人をのぞけば日本でもある程度は知られているであろう。

本書は次のように構成されている。

Introduction

PART I The origins of the Russian synthesis

1. The prehistory of the Russian synthesis
2. Classical political economy in Russia
3. Marginalism in Russia

Part II The Russian synthesis

4. Tugan-Baranovsky on capitalism and socialism
5. Tugan-Baranovsky's synthesis
6. The mathematicians' syntheses

Conclusion

全6章からなる本書は、ジーベルからユーロフスキーにいたるまでの「総合」の試みの経過をほぼ時系列にそって各論者の仕事に立ち入って論じている。このために著者は当時の原資料に（アーカイヴでの探索も含めて）丹念にあたるとともに、その後やや忘れ去られた感のあるこれらの著述家たちの近年のロシアにおける再刊にも目を配っている。さらに、ヨーロッパ諸言語による新旧の研究文献も広く参照している。英語以外の文献からの引用はすべて著者によって英訳されている。特にロシア語文献の多くは初めての英語での紹介である。多言語国家スイスの研究者ならではのスタイルであろうか。

ジーベルは、『資本論』が出版された直後の1871年の彼の学位論文において、マルクスの理論のリカードからの継承関係を示そう

とした（『社会・経済研究におけるデヴィッド・リカードとカール・マルクス』、マルクスは1873年に刊行された『資本論』第1部第2版への「後記」においてこの著作を高く評価している）。また、ダニエルソンが『資本論』の最初の外国語訳としてのロシア語版を出版したのは1872年であった。リカードの『原理』の最初のロシア語訳はジーベルの手によって1873年に刊行された。このように、当時のロシアにはリカードに先立ってマルクスが導入され、これらの著作は両者をほぼ一体と捉えるジーベルの研究の圧倒的な影響のもとに読まれた。

ロシアに最初に限界主義の理論を導入したのはツガン-バラノフスキーであった（1890）。日本では彼の名はほとんどもっぱら『英国恐慌史論』の著者としてのみ知られているが、本書では彼は極めて多産な著述を残した世紀転換期を代表する経済学者・教育者として描き出されている。そして彼のこの論文が本書のストーリーの出発点に位置する。当時のロシアでは、限界理論と古典派理論は相互に相容れない理論としてではなく、むしろ相互補完的な関係にあるものとして共に受け入れられた。この直後の1894年に『資本論』第3部が出ると、つづいて1896年には同じダニエルソンによるそのロシア語訳が刊行され、同年に限界論者のバーム-バヴェルクが『マルクス体系の終焉』を発表した。いわゆる転形論争の開始である。ジーベルはこのときすでに世を去っていたが、彼の解釈にもとづくリカードとマルクスの平穏な連続関係はこの「ショック」によって断ち切れ、限界理論も視野に入れた労働価値論と価格諸理論との「総合」が深刻な検討課題として立ち現れた。この作業において先鞭を付けたのもツガン-バラノフスキーであった。

ツガン-バラノフスキーに続く「第二世代」の「総合」を担ったのは、シャボシュニコフ、

ユーロフスキーといった数理的手法を駆使する経済学者たちであった。後者のこの面での主著『価格論試論集』（1919）は、その翌年に第 8 版が出たマーシャルの『経済学原理』と同様に古典派経済学を限界理論の中に吸収統合しようとする試みであった。それと共に、革命後のソビエトでは限界理論は経済学の世界から駆逐されていき、「総合」の試みも跡を絶たれた。また、ロシア国外でもこのような試みはほとんど知られることも評価されることもなかった。

以上が本書のおおざっぱな筋書きである。このような極めて複雑な錯綜した過程が 170 ページ余りのコンパクトな著作にまとめられている。著者の仕事は国際的な注目を集め、学位論文としては 2012 年にヴォー州 [スイス] アカデミー賞、2013 年に HES の Joseph Dorfman Best Dissertation Prize、また刊行書としては 2016 年に ESHET の Best book & Blanqui Lectures にノミネートされている。

本書の各章末には多数の新旧ロシア語文献が挙げられているが、著者名も表題もすべてローマ字で表記され、それに英訳が付されている。これらの資料を活用するのは直接ロシア語で原典に当たろうとする読者のみであろう。この点からすれば、むしろロシア語での表記のままの方が有用であったのではないかと思われる。

なお、著者は本書につづいて上記のジベールの主著の英訳の仕事に取りかかっていることである。マルクスに「ほめられた」ことでその存在だけはこれまでも知られていたがほとんど読まれることはなかったと思われる「古典派とマルクス」についての先駆的な著作が各国の研究者に供されることが望まれるが、ロシア語の膨大な著作の英訳刊行の実現にはなおいくらかの時間を要するであろう。

（竹永 進：大東文化大学）